



縄文のつる編み

11月29・30日の2日間「縄文のつる編み」を2年ぶりに開催しました。自然のものから材料を調達し道具作りをしていた縄文にならい、史跡公園でつるを自ら採集し、カゴ編みに挑戦！県内から18名が参加しました。

つるを採る。DAY1

1日目は、史跡公園内にある山へつるを採集しに行きます。かごに使用するのは、土の中を這っているつる。枯葉をかきわけ、つるを追いかけていきます。

昨年度イベントを休止したためか、今年は十分にカゴが編めるくらいの量が採集できました。



午後は、根切りと洗浄作業。小さな根っこを切り、泥汚れを落とします。きれいなカゴを編むにはとても大事な作業！一本一本ていねいにつるをきれいにしました。

木の実の貯蔵に大活躍したカゴ

東名遺跡では大人の上半身ほどもある大きなカゴが、ドングリが入った状態で多数見つかっています。貯蔵穴という穴にドングリが入ったカゴを入れて水漬けにし、虫を殺したり、短期間に生貯蔵をするために行っていたと考えられます。

またカゴは底が破けた状態で見つかることが多く、水漬けすることで強度が下がってしまうからだと考えられます。カゴは繰り返し使用せず1シーズン限定で使い捨てにするような使われ方だったのかもしれません。

8000年も前に確立していた「編む技術」

東名遺跡は約8,000年前、縄文時代早期の遺跡です。この遺跡では現代につながる編組技法がほぼすべて確認できたほか、形状によって素材植物や技法が使い分けられていました。8000年も前から「編む技術(編組技法)」が確立していたのです。

縄文人の編みカゴ

低湿地遺跡が明かす植物利用

日本の土壤は酸性で、かつ高温多湿の気候のため、木製品や種子などの植物質遺物は腐って残りません。しかし、低湿地の遺跡

(地下水を多く含む場所にある遺跡)の調査が増え、以降、植物の検出例が増加しました。編み物やカゴもそのひとつです。

有名な低湿地遺跡として青森県の三内丸山遺跡、是川遺跡、佐賀県の東名遺跡、福井県の鳥浜貝塚が挙げられ、なかでも東名遺跡からは、国内でもっとも多い約740点の編み物・カゴが出土しています。出土したカゴは一体どんな使い道があったのかを見ていきましょう。

カゴなど編んだり組んだりする技術で製作されたものは「編組製品」とよばれ、食料や資材などの採取・運搬に利用されていたほか、目のすき間を活かしてザルやフライにしたり、採取した木の実などを入れるためのポシェットとしても使っていました。

つるを編む。DAY2



2日目。学芸員による「縄文人の植物利用」についての縄文講座から始まりました。

近年、縄文時代の植物利用の研究が進み、カゴの素材の地域性や、多様な編み方が明らかになってきたことが詳しく解説されました。



待ちに待った「つる編み」の時間です！作りたいカゴの大きさをイメージしながら“芯”となるつるを用意します。

十字に組んだつるに、編み材のつるを上下に巻きつけながら底を作ります。つる編みの難所は

この「底作り」！最初は慎重に編み進めていた皆さんですがコツを掴むのが早く、どんどんカゴの形になっていきました。

今年は取っ手付きの大型のカゴが人気！出来上がったカゴを掲げて嬉しそうに見せあっていたのが印象的でした。



INFO 縄文村講演会のお知らせ

貝塚が語る縄文の魅力

- 学史の貝塚を読みとく -

日時 2026年2月1日(日)

13:00 ~ 16:30(開場 12:30)

会場 東松島市コミュニティセンター

申込 申込不要・聴講無料

国史跡指定30年を迎えた里浜貝塚、そして千葉県加曽利貝塚、愛知県吉胡貝塚。日本考古学を進展させた3大貝塚にスポットをあてた講演会を開催します！